

地歌舞 古澤侑峯
津軽三味線 黒澤博幸

夢幻の世界

【プログラム】

第一部

- 1) 地歌舞のワークショップ 古澤侑峯
- 2) 地歌舞「高砂」 古澤侑山、古澤侑陽
- 3) 地歌舞「松」 古澤侑里
- 4) 地歌舞「梅」 古澤侑衣、古澤侑世
- 5) 地歌舞「雪」 古澤侑峯

《演目解説》

2)「高砂」

月の出と共に出航した船は、無事鳴門海峡を渡って、住之江につきましたと、めでたく謡いあげた名曲。結婚式などで謡われる謡曲から取材している。

3)「松」

『松』を『待つ』にかけて、『待つは辛いとな』と、始まる。松に纏わる様々な事柄、小さく可愛らしい姫小松から、松の位の花魁や立派な老木として有名な住ノ江の、松までを次々と歌い込んで、さりげなく人の一生を暗示している。

4)「梅」

梅に鶯はつきものであるが、まだ初鳴きの鶯を少年に、蕾もかたい梅を少女になそらえて、早春の淡い恋心を歌っている。お茶の所作に始まって再びお茶の所作で終わるといふ洒落た振り付けになっていて、この度は二人立ちに演出している。

5)「雪」

音もなく降り積もる雪。浮世を捨てて、仏門に入ろうと、尼寺に向かう女は、過ぎ去った恋の思い出に涙するのであった。地歌の中でも一番重要とされる名曲。

第二部

- 1)津軽三味線のお話 黒澤博幸
- 2)仁太坊節 黒澤博幸
- 3)津軽あいや節メドレー 黒澤博幸
- 4)津軽三味線即興演奏 黒澤博幸
- 5)雪奉り 黒澤博幸

- 6)源氏舞-葵の上- 古澤侑峯 黒澤博幸

《演目解説》

2)「仁太坊節」

津軽三味線の始祖が唯一残したメロディー。～テテレコテン～

3)「津軽あいや節メドレー」

北前船という日本の貿易船が港から港へ移動していく時に歌も一緒に伝わり、新潟という港で、目の見えない女性の門付け芸人達により津軽までその歌が運ばれて出来た曲。

4)「津軽三味線即興演奏」

津軽三味線の演奏はもともとジャズのように即興演奏であり、有名な津軽じょんがら節も即興演奏なので弾く人、弾く場所により何通りもの演奏がある。

5)「雪奉り」

津軽には「こな雪」、「わた雪」など七つの雪が降りつもると言われる。そんな雪の舞を描いた真冬の叙情詩。黒澤博幸のオリジナル楽曲。

6)「葵の上」-古澤侑峯-黒澤博幸

「源氏物語」の中でも有名な「葵の上の巻」から取材している。

光源氏の正妻の葵の上は、懐妊してから具合が芳しく無く伏せていた。その床へ毎夜悪霊が現れては葵の上をさいなむ。ある日、高僧を呼んで祈禱を行なったところ悪霊は、わらわは、六条のみやすんどころ(六条の御息所)の怨霊なりと身を明かし怨みの数々を述べて去っていく。

六条の御息所(みやすんどころ)は、源氏が葵の上を正妻に迎える前からの恋人で、前の皇太子の未亡人でもあり、世間では源氏の正妻に迎えられようであろうと、目されていた人でもあった。また、葵の上とは「車争い」と呼ばれる事件で、下々の者達が争った挙句、六条の車が恥をかかされると言った因縁の仲でもあった。

教養深く、美しい貴婦人の六条のみやすんどころの魂は勝手に本人の知らないうちにその身を離れて生き霊となり、夜な夜な葵の上の所に現れていた。

※源氏舞は古澤侑峯が源氏物語の 54 帖の物語をすべて舞の作品に仕上げたものである。

演奏は、地歌ではなく、琵琶や鼓など、毎回その巻に合った演奏で開催している。西暦 2000 年から制作しはじめて 2008 に完成させたが奇しくも、この年は源氏物語が書かれてちょうど 1000 年目に当たっていた。